

徳島大学におけるインターンシップの実態調査報告

徳島大学地域創生課 COC プラス推進本部

▼目的

インターンシップ制度はCOCプラス事業の1つの柱となるものである。今後はインターンシップ制度を単なる職業見学・職業体験に留めず、学生の就職や、若者を活用した新規事業の開拓等、意義有る制度にすることが求められる。産学官が協働し企業・学生双方にとって意義ある制度にするために、現在の徳島大学のインターンシップの現状を調査しまとめた。

▼学生

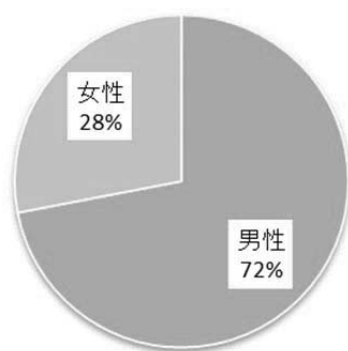
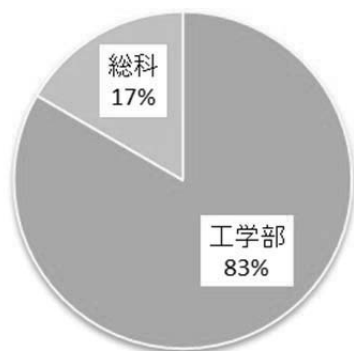
本資料は「平成26年度 徳島大学『短期インターンシップ』授業に関する学生・企業アンケートおよび『短期インターンシップ事後報告会』学生・企業アンケート」とインターンシップ経験者である学生8名へのインタビュー調査を元に作成し、学生がインターンシップをどのようなものとして捉えているのかを調べた。

1.アンケート対象者

	履修者(人)	有効回答数(人)
総合科学部	59	48
工学部	323	241
合計	382	289

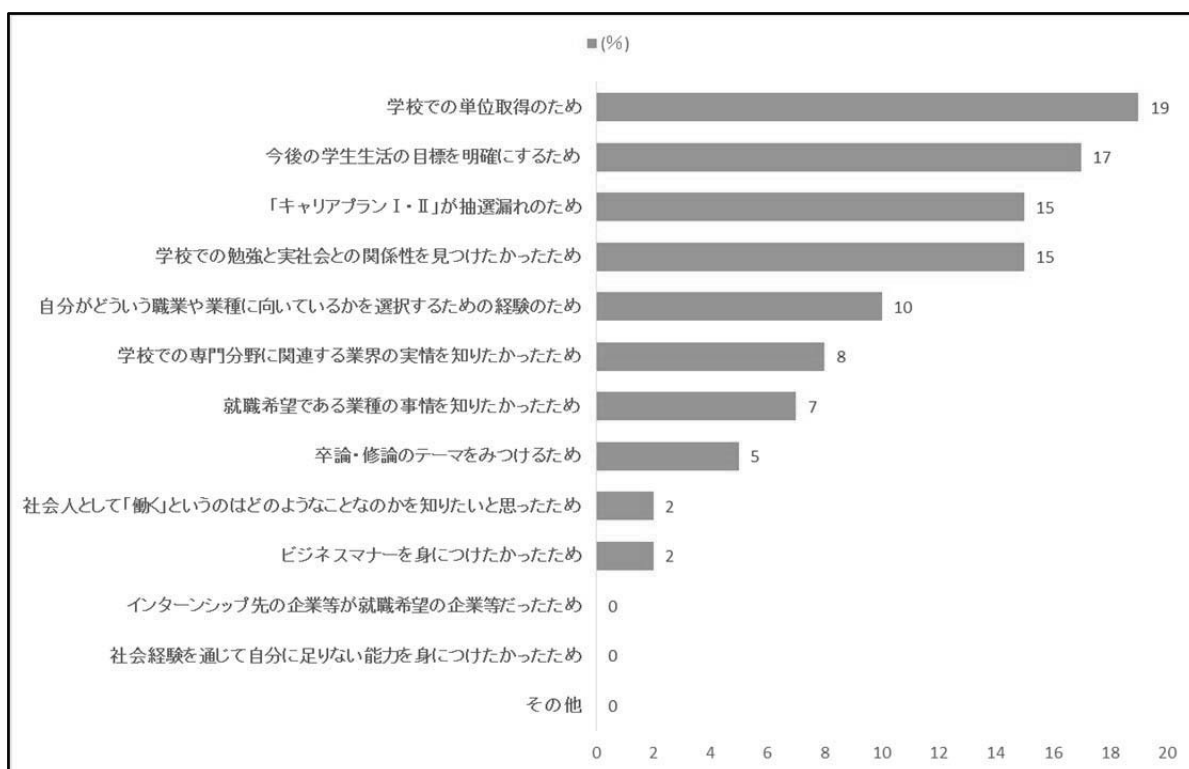
あなたの所属を教えてください	(%)
工学部	83
総合科学部	17

履修者(男女比)	(人)	(%)
男性	272	72
女性	106	28



2.「短期インターンシップ」を受講した理由

短期インターンシップの授業を受講した理由は何ですか(3個以内)	(%)
学校での単位取得のため	19
今後の学生生活の目標を明確にするため	17
「キャリアプラン I・II」が抽選漏れのため	15
学校での勉強と実社会との関係性を見つけたかったため	15
自分がどういう職業や業種に向いているかを選択するための経験のため	10
学校での専門分野に関連する業界の実情を知りたかったため	8
就職希望である業種の事情を知りたかったため	7
卒論・修論のテーマをみつけるため	5
社会人として「働く」というのはどのようなことなのかを知りたいと思ったため	2
ビジネスマナーを身につけたかったため	2
インターンシップ先の企業等が就職希望の企業等だったため	0
社会経験を通じて自分に足りない能力を身につけたかったため	0
その他	0



上位 3 個中 2 個が「学校での単位取得のため」、「キャリアプラン I・II が抽選漏れのため」であることから、単位取得を目的として受講している学生が多いことが分かる。しかし、単位取得が目的の一つであることはインターンシップの充実度とはあまり関連がないようである。

学生にインタビューを行った結果、授業、自由応募を問わず意欲的にインターンシップに参加した学生は、インターンシップ後にその経験を就活に活かしたり、就活の方向性を定めたりすることができていた。一方で単位取得を唯一の目的とした学生に関しては、一時的にインターンシップ先の企業や業界に興味が高くなることはあっても、就活に向けての具体的な変化が見られない場合が多かった。以下、その理由を 3 つ述べる。

① インターンシップに対する学生の目的意識が低い

単位取得が唯一の目的になってしまうと、インターンシップを「自分のこと」として捉えられない傾向がある。つまり、インターンシップが学生自身の就活、将来と地続きでつながっているという意識が希薄であると考えられる。

② 学業との両立が困難である

インタビューの結果、インターンシップの多くが夏に行われることから学会と重なってしまい、学会を優先する学生が多いことが分かった。また、学生がインターンシップや就職活動によって授業を欠席することに対して理解を示す教授とそうではない教授がいることも判明した。学生は自分が所属する研究室と教授によって参加できるインターンシップや就職活動が限られてしまうというのが現状である。

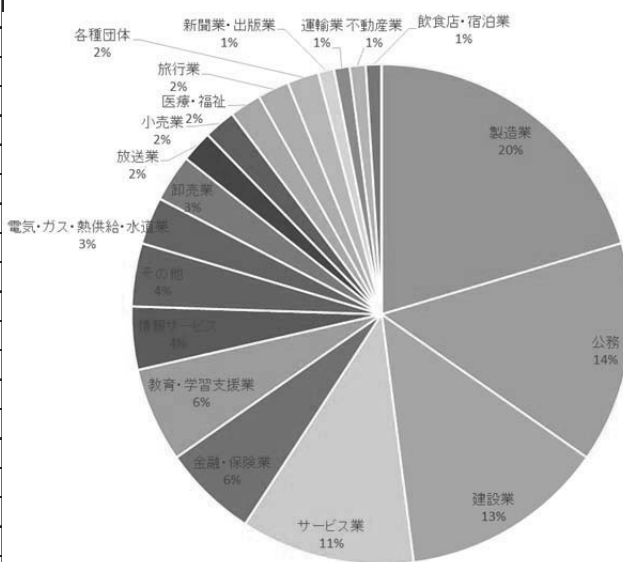
③ 受け入れ企業での実習内容

あらかじめ実習計画が知らされなかったり、雑務をこなすだけだったり、その企業の業種とは関係の無い実習内容である場合、学生は離れがちである。

これからの課題としては、学生の意識改革、大学（研究室・教授）の理解と協力を得ること、インターンシップの社会的な位置づけについて受け入れ企業等・大学・インターン生（学生）との間で共通認識を持つこと等が挙げられる。

3. インターンシップ先の業種

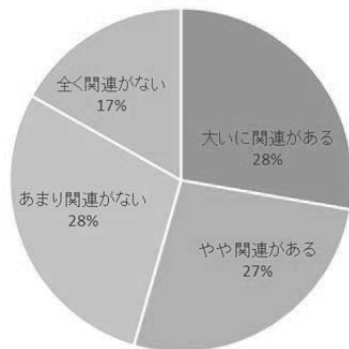
該当する業種を1つ選んでください	(%)
製造業	20
公務	14
建設業	13
サービス業	11
金融・保険業	6
教育・学習支援業	6
情報サービス	4
その他	4
電気・ガス・熱供給・水道業	3
卸売業	3
放送業	2
小売業	2
医療・福祉	2
旅行業	2
各種団体	2
新聞業・出版業	1
運輸業	1
不動産業	1
飲食店・宿泊業	1
通信業	0



インターンシップ先としては製造業、公務、建設業が多い。インタビューの結果、自分の専攻を活かしたいという学生もいれば、見識を広げるためにさまざまな業種のインターンシップに参加したいという学生もいた。

4. インターンシップ先の企業等の業務内容と学生の大学での専攻との関係

インターンシップ先の企業等の業務内容や今回の実習内容は、あなたの大学での専攻と関係がありますか。	(%)
大いに関連がある	28
やや関連がある	27
あまり関連がない	29
全く関連がない	17

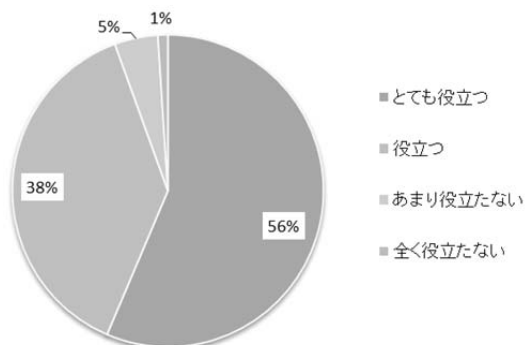


インターンシップ先の企業等の業務内容と学生の大学での専攻との関係については、「大いに関連がある」、「やや関連がある」を合わせると 55%であり、「あまり関連が無い」、「全く関連がない」を合わせると 45%である。

インタビューの結果、専攻を活かしたインターンシップに参加したいと考える学生もいれば、視野を広げるために専攻とは関係なく自分の関心のある業種のインターンシップに参加したいという学生もいた。インターンシップに求めることは学生ひとりひとりによって全く異なるということが分かった。

5. インターンシップ経験が将来設計やキャリア設計に役立つかどうか

今回のインターンシップ経験は、将来設計やキャリア設計に役立つと思いますか。あてはまるものを選んでください。	(%)
とても役立つ	56
役立つ	38
あまり役立たない	4
全く役立たない	1



「とても役立つ」、「役立つ」を合わせて 94%の学生がインターンシップ経験は将来に役立つと回答している。インターンシップに対する期待は全体的に非常に高いことがわかる。

6. 学生の考える理想のインターンシップとは

ここでは「学生にとって理想的なインターンシップとはどういうものだと思いますか」というインタビューに対する学生の回答を掲載する。

前段階

- ・学業に影響が少なく、参加しやすい長期のもの
- ・堅い雰囲気ではなく、気軽に参加できるもの
- ・参加者選考が無く、幅広い人数を受け入れてくれるもの
- ・単位ではなく、就職のためのインターンシップ
- ・大学で学んでいることが社会でどれだけ通用するのか知りたい
- ・大学で学べないことも知りたい

仕事理解型

- ・知識、考え方など学びがあるもの
- ・短期間で仕事の内容を理解できるもの

採用直結型

- ・該当なし

業務補助型

- ・実験の現場を見学したい
- ・本当の意味での就業体験

課題協働型

- ・たとえ単位のためでも興味のある所に入ってその能力を増やすもの

事業参画型

- ・職員にも学生にも実のあるインターンシップ
- ・インターンシップ用のプログラムではなく、職員と一緒に実際に企業が抱える問題などに取り組める
- ・学生、客扱いでなくインターンシップ生として職員と同じように接してくれるもの（ただし職員並みの責任はとれない）

その他

- ・リスク無く身になる経験が積める（中学生の職業体験のような気軽なイメージ）
- ・いろいろな人と話すことができる
- ・授業で参加すると「自分が粗相をすれば次の代の学生たちがインターンシップに参加できなくなる」というプレッシャーがあるので、こうした余計な焦りを感じずに済むのが理想
- ・採用直結型のインターンシップに違和感がある（「顔を売らなければ」、「人脈を作らなければ」というような余計な気遣いに気をとられてインターンシップそのものに集中できない）ので、のびのびとその企業について学び、体験できるもの

7.まとめ

「短期インターンシップ」において、インターンシップ参加が単位取得に結びつくことでインターンシップ参加者が増えたことは事実であるようだが、単位取得を唯一の目的としてしまった学生はインターンシップが学生自身の就活、将来と地続きでつながっているという意識が希薄なようである。一方、インターンシップを自分の就活、将来に役立てようという目的意識がはっきりしている学生は「短期インターンシップ」を有効に使い、加えて自由応募のインターンシップにも参加している傾向にある。しかし、インターンシップ先で学生が望んでいるような経験をさせてもらえないこともしばしばあるようだ。さらに、研究室や教授によってインターンシップや就職活動に対する理解や協力が得られない場合もある。

学生の考える理想のインターンシップとは、自分が将来職員としてその企業等で働くことをリスク無くシミュレーションできるものである。インタビュー対象者全員が現場の見学や実務を望んでいることがそれを裏付けていると言える。以上のことから、これからの課題としては、学生の意識改革、大学（研究室・教授）の理解と協力を得ること、インターンシップの社会的な位置づけを企業及び関係者、団体にとって有効性の高いものにしていくこと等が挙げられる。

▼企業

◇調査概要・資料

①『平成 26 年度短期インターンシップアンケート』

授業受講者並びにインターンシップ生受入企業に対し行ったアンケート調査。

学生有効回答数 289。企業有効回答数 61。

②『平成 25 年度「短期」インターンシップ報告書』

授業受講者がインターンのプログラム内容や参加しての感想をまとめたレポートを綴った報告書。

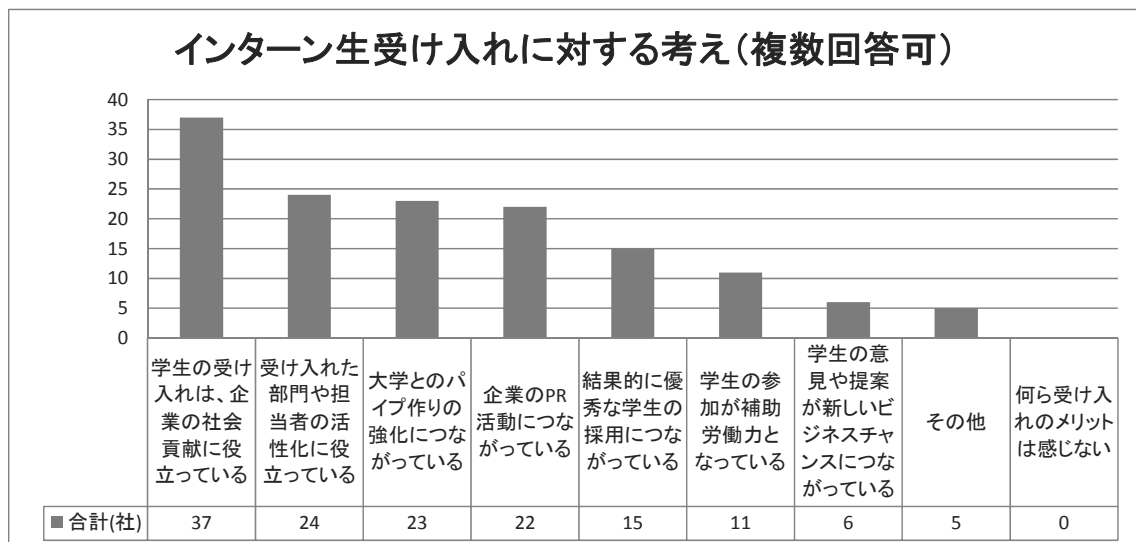
③「平成 27 年度徳島大学学外研修評価表」

④インターンシップ受講生に対するインタビュー形式の聞き取り調査。(H28.2/8～2/15、8名)

1.インターン生受け入れのメリット

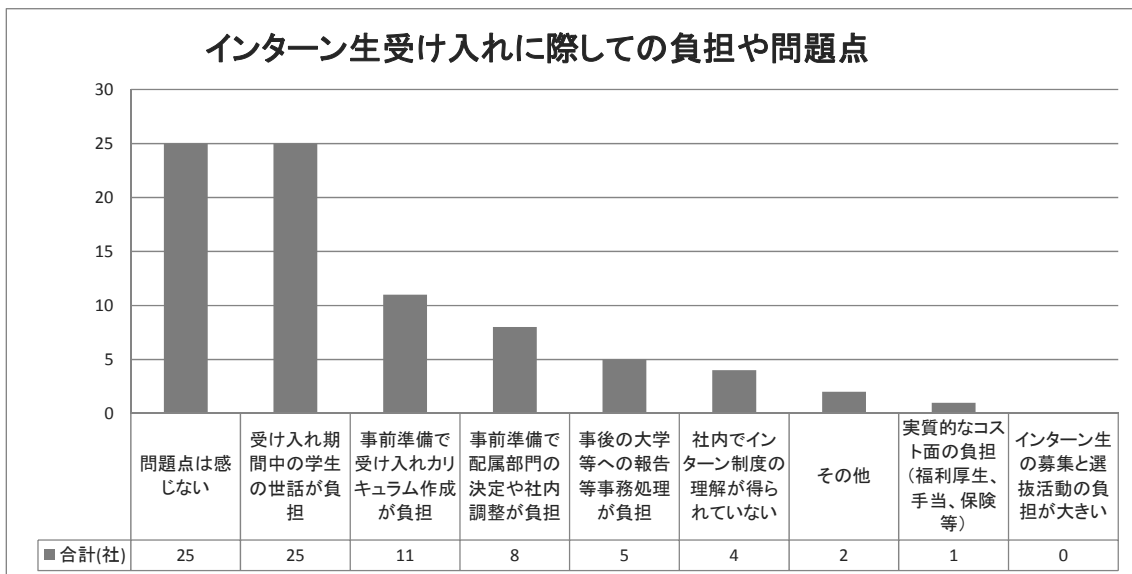
インターンシップ制度の企業側の利点としては、企業・業界広報、採用機会、若者を活用した事業推進や新規事業の推進、社内活性化等が挙げられる。(右図参照)

しかし実情は 62%の企業が学生の受入を社会貢献活動として捉えており、社内活性化、企業 PR と考えている企業は約 40%、学生の採用や新規事業推進に至ってはそれぞれ 25%、10%と低い数値を示した。企業側がインターンシップ制度に実効性の上でメリットを見出せずにいる現状が浮き彫りとなった。



2. インターン生受け入れのデメリット

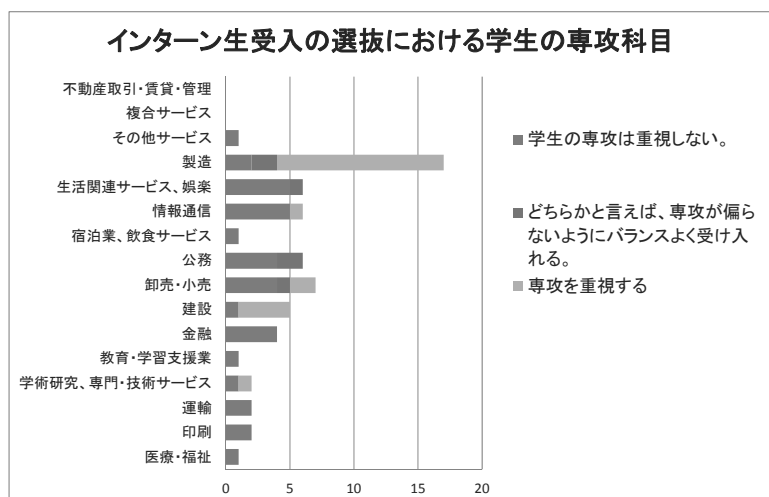
特に問題は感じないという企業がある一方で、学生受け入れ期間中の担当部門や担当者への負担が大きいと感じている企業も半数近くにのぼる。受け入れ準備段階においても、担当部門の選定やカリキュラム作成、学生・大学との連絡等、通常業務とは異なる業務が上乗せされることにより、企業側の負担が大きくなっている。



3 企業と学生のマッチング阻害要因

特に製造業、建設業、学術研究・専門技術サービス業では大学での専攻を重視しており、自業界に関する知識を有する学生を望む傾向が伺える。しかし、先の『学生アンケート結果』でも触れたように、工学部系の学生の多くが製造業と共に公務へのインターンも志望しており、製造業のインターンシップに参加した者は20%、公務のインターンシップに参加した者は製造業に次いで多い14%にのぼった。専門性の高い学生が公務へと流れてしまっている傾向が伺えるが、学生が自専門とは別に公務を志望するには如何な事由があるのだろうか。

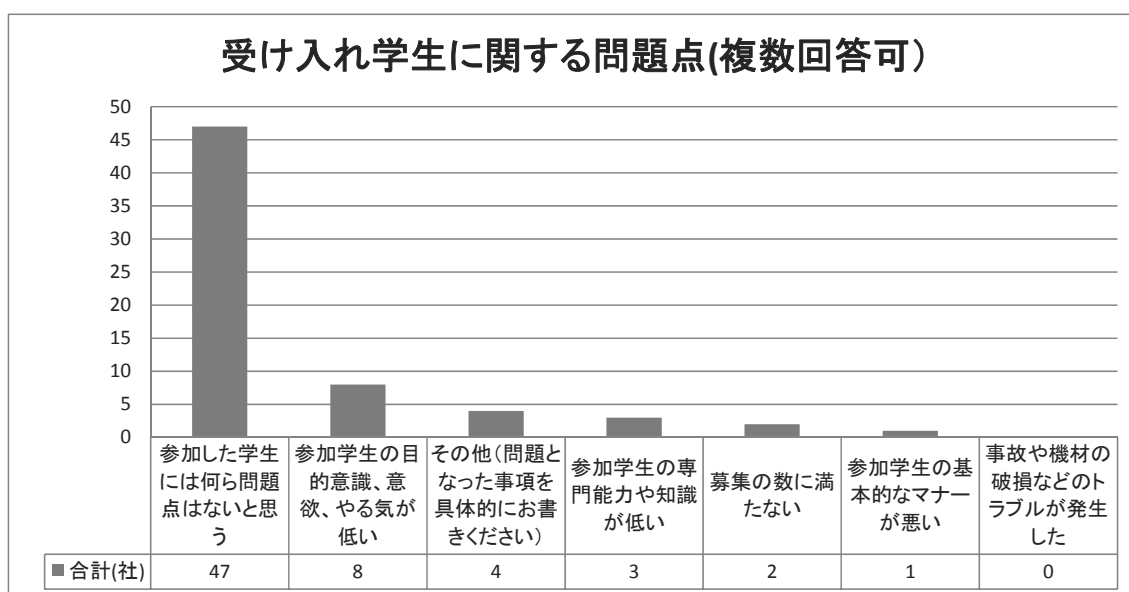
該当学生2名にインタビューを行ったところ、『自分の専攻や将来の夢から公務を希望した』との意見があった一方で、『自らの専攻分野に通じる受け入れ企業自体が少なく、さらに遠方へは交通手段が限られており連日の参加が難しかった為、公務のイン



ターンに参加した』との声もあった。専門とリンクした企業への意識はあるものの、上記のような理由から、「安定」のイメージのある公務への参加に流れているようである。

学生の生活圏からの距離、交通や宿泊などの便の良さ・悪さがインターン先を選択する際の一因となっている為、そういった面での何らかの支援が必要であろう。さらに、専攻とリンクした受け入れ企業の新規開拓、学生の間で知名度の低い B to B 企業等の紹介・PR や学生自身の企業研究を推進することが課題といえる。

4. 受け入れた学生に関する問題点



78%の企業からは学生に問題はなしとの回答を得たが、参加学生の目的意識、意欲が低い点や専門能力や知識が低いため十分な研修とならなかったとの回答も得られた。インターンシップ後に企業から提出される“評価表”においても、「より積極的に質問を行ったり関わったりしてほしい」、「こちらからの問いには答えが返ってくるが、本人側からの報告や相談がない」、「自身の成長の為に、もっと好奇心をもって初めてのことにも取り組んでほしい」といった担当者からのコメントが見られた。

職務	課題（宿題）への取り組みが不十分
	ネットサーフィンをしていた
	指示していた仕事ができても「できました」の報告がない
	質問がない（少ない） 積極性がない
マナー	挨拶がない（声が小さい）
	インターンシップ生同士の私語
	説明中・休憩中（お客様から見える所だった）の居眠り
	寝坊で遅刻（例年3～4件発生） 当日になって無断欠勤 直前になって「用事があるので日程・時間を変更してほしい」と企業に交渉
破損・紛失	器物損壊（マウス、ウェルカムボード、試験管）
	企業から貸与された名札を紛失
要望	本当に興味がある学生に来てほしい（単位のためにきていることが態度でわかる）
	大学の教職員に見に来てほしい（他の大学・学校はきている）

また、過去を含めその他問題となった事項としては上の表のようなものが挙げられる。なお、インターンシップ期間中の器物損壊や事故等に関する保険としては、工学部学生に関しては入学時に“学生教育研究災害傷害保険”に加入しており、総合科学部生に関してもキャリア支援課を通してインターンシップに

申し込んでいる学生は大学生協が提供している“学生賠償責任保険”に加入することになっている。しかし、大学を通さず自由応募で参加する一部学生に関しては学生の意思に任されている為、企業側が安心して学生を受け入れられる為にもこういった学生に対し保険加入の周知徹底を行っていく必要がある。

上記のような現状から、保険関係やインターンシップ中の取り組み姿勢、最低限のマナー等、企業に送り出す前の“事前教育”を大学側が行う必要性も出てきた。しかし、学生インタビューによると、インターン参加前の授業において、「『インターン先での粗相は来年参加する学生に影響が出る為、インターン先では迷惑をおかけしないように』と注意されたことから、とにかく失敗だけはしないようにしなければと受け身になってしまった」との声も聞かれた。事前教育の内容にも留意しなければ、学生を必要以上に萎縮させ、企業が求める“積極性”、“主体性”を持って取り組めない可能性がある。学生が目的意識を持って、主体的にインターンシップに取り組めるような事前教育が求められている。

5. インターンシップ実施企業 プログラム一例

インターンシップを行ったことで実際に学生の採用や新しいビジネスチャンスにつながった企業をピックアップし、その研修内容等をまとめた。

なお、企業のピックアップには、H26.インターンシップアンケート調査から、インターンシップ生受け入れに関し、『優秀な学生の採用につながっている』、『学生の提案や意見から新しいビジネスチャンスにつながっている』と回答した企業を選んだ。

事例-①

日本航空 徳島支店

期間：8/24～8/28 5日間

1日目	企業概要・企業理念説明 セールス業務（外回り営業）についての説明会 アンケート集計についての説明会
2日目	旅行プラン説明会（売り込み）に参加
3日目	空港運営業務…整備業務体験、スタッフフリーフィングに参加 日本航空営業業務…企業アンケート集計・分析・発表 (今後の営業方針決定の資料として客層別需要の分析を行い発表)
4日目	空港運営業務体験…ターミナル施設見学、機側作業見学、 旅客業務研修
5日目	日本航空営業業務…旅行代理店への外回り営業同行
●学生コメント	●企業コメント
機械の設計や製造・整備関連のエンジニアを目指しているので本物の旅客機のエンジンやセンサーなどが見られて大変意義のあるものだった。 営業の基礎は人間関係にあり、話術とコミュニケーション能力の重要性を感じた。	営業は転勤者もっており、必ずしも県内出身者ではない。地元とつながりの深い学生に来てもらえることは地元情報を得られる上でも大きなメリット。

日本航空徳島支店では、企業説明や施設内見学の他、外回り営業に同行する実務研修も行っている。また、今後の営業戦略資料として実際の企業アンケートを集計・分析し、その結果の発表会も行った。

学生側は業界理解や働くことへの理解が進み、企業側は優秀な学生の発掘や、学生の発表から今後の営業戦略のヒントを得る機会となったようである。

事例-②

株式会社ネオビエント（あすたむらんど徳島）

期間：8/1～8/31 期間中5日間程度

1日目	企業概要・企業理念説明
	最終日発表会の説明「あすたむらんど改善案」
	マナー講座
	施設内見学
2日目	実務研修（配属部署に分かれて実施）
	①フロアでの接客業務 ②総務部での園内の点検・修理業務
3日目	午前：各配属部署での実務研修 午後：自習…最終日企画発表の準備
	午前：各配属部署での実務研修 午後：自習…最終日企画発表の準備
4日目	午前：各配属部署での実務研修 午後：自習…最終日企画発表の準備
	午前：各配属部署での実務研修 午後：自習…最終日企画発表の準備
5日目	17時より最終企画発表会 発表テーマ「子供たちのために体験工房ができること」 「若年層のお客を集める為には？」等
	●学生コメント 朝夕の点検等を1人で任せ、責任は感じたが会社の一員として働いていると実感した。最終日の発表の為、工房体験に来た親子にアンケートをとるなど自分で考え調査した経験は貴重だった。
	●企業コメント 職員の目では気づかなかった所まで細やかな視点で見ることができており、意見は参考になった。一方で、受入担当者への負担が今後の課題。

（株）ネオビエント（あすたむらんど徳島）では企業説明や施設内見学の他、各部署での実務業務を行っている。また、最終日には「あすたむらんど改善案」というテーマでの発表があり、学生は5日間、各々課題を見つけ、時には来場者にアンケートをとるなどして案をまとめ、最終日に発表する。学生の自主性・積極性を意識したプログラム内容である。

企業側は学生視点の提案を受け、よりよい施設運営に活かすことができる。

今後目指すところは、見学型・体験型インターンシップから企業学生双方にとって意義のある実践型インターンシップへの移行であるが、実際は実施期間も2～5日間程度のものが多く、今回取り上げた企業含め、実践型インターンシップを行っている企業の中でも“仕事理解型”のものがほとんどのようである。（下図参照）また、課題発見、改善案のプレゼンなど、実践型インターンシップに通ずるプログラム内容を実施してはいるものの、期間が短く十分な基礎知識や問題意識がないままに取り組むことになったり、改善案の提言だけ行い実際に問題解決にまで至らなかったりと、まだまだ“課題協働型”、“事業参画型”（下図参照）のような実践型インターンシップのスタイルが定着しているとはいえない現状が明らかとなった。

実践型インターンシップの“スタイル”

	特徴	学生の教育効果	企業のメリット
仕事理解型	1～2週間程度の職場・業務体験が中心。最後にレポートやプレゼンによる報告を実施することが多い。	自己の適性・志向の理解	企業・業界広報
採用直結型	実際に一緒に働いてみてお互いを見極める採用活動の一環。外資系企業や大手ベンチャー企業などで実施。	働くこと・業界の理解	採用マッチング
業務補助型	普通のアルバイトでは経験できないような企業の業務に取り組み、期間は1か月以上の長期が多い。	社会人基礎力	若者を活用した業務の推進
課題協働型	会社と大学を行ったり来たりして課題発見や企画立案に取り組む。グループワーク形式が多い。	社会人基礎力 + 学びの実践	若者の発想の活用・社内活性化など
事業参画型	企業の新規事業や変革プロジェクトの一員として業務に取り組み、期間は1か月から長いものと半年間の長期が多い。	社会人基礎力 + リーダーシップ	若者を活用した新規事業などの推進

6.まとめ

企業にはインターンシップをCSRの一環としてではなく人材

確保の機会やビジネスチャンスとして捉える概念は浸透しているとは言えず、また、インターンシップの活動内容は受け入れ企業任せにしている現状があるため、職場見学や職場体験程度で終わっているものも見受けられる。また、インターンシップに意欲的な企業においても、“仕事理解型”の実践型インターンシップに留まっているのが現状である。

企業負担を減らし、インターンシップの内容をより実践的で意義有るものにするため、“採用直結型”、“業務補助型”、“課題協働型”、“事業参画型”の実践型インターンシップのモデルカリキュラムの作成やプロトタイプとなる企業の支援、産学官同士の情報共有を密に行っていく必要があるだろう。

『学生の世話をする』という意識から『学生と仕事をする』という意識変革が必要であり、学生においても仕事に対する意識変革が求められる。

企業にとってインターンシップが意義あるものであるという構図を作り出し、意識変革を求めていくことが企業、大学、ひいては地方にとっても留意すべき今後の課題と言えるのではないだろうか。

▼総括

最後に、本調査で明らかになったことを総括する。

学生

【問題】

- ① インターンシップに対する目的意識の低さ
- ② 学業との両立が困難であること
- ③ 受け入れ企業等で学生が望んでいるような内容のインターンシップが行われていないこと

【原因】

- ① 単位取得が唯一の目的になってしまい、インターンシップが学生自身の就活、将来と地続きでつながっているという意識が希薄であること
- ② ・時期的にインターンシップと学会が重なってしまうこと
・インターンシップや就職活動によって授業を欠席することに対して、教授の理解が得られないこと
- ③ あらかじめ実習計画が知らされなかったり、雑務をこなすだけだったり、その企業の業種とは関係の無い実習内容である場合があること

【今後の取り組み】

- ① 学生の意識改革、大学での事前教育
- ② 大学（研究室・教授）の理解と協力を得ること
- ③ インターンシップの社会的な位置づけを企業及び関係者、団体にとって有効性の高いものにしていくこと

企業

【問題】

- ① インターンシップを CSR の一環として捉えている企業が多いこと。
- ② プログラム作成や受入れ期間中の学生対応が企業の負担になっていること。
- ③ 受入れ意思があっても大学からの距離・交通手段・宿泊費等の事由から学生の応募がない企業があること。
- ④ 見学、体験に留まり、実践型インターンシップが定着していないこと。

【原因】

- ① 受入れノウハウがない、蓄積していないこと。

- ② 企業の内部・外部とわず、インターン生受入れ専門の担当や機関がないこと。
- ③ 宿泊施設や送迎・交通費の支援システムが整っていないこと。さらに、阻害要因を上回る魅力あるプログラム・コーディネートができていないこと。
- ④ 受入ノウハウがなく、企業負担が大きい現状ではインターンシップへの理解が得られていないこと。

【今後の取り組み】

企業負担を減らし、実践型インターンシップが企業にとっても意義あるものであるという構図を作り出す為、

- ① “採用直結型”、“業務補助型”、“課題協働型”、“事業参画型”の実践型インターンシップのモデルプログラムを作成する。
- ② プロトタイプとなる企業の支援、産学官同士の情報共有を密に行っていく。
- ③ 企業のインターンシップを支援・コーディネートする機関をつくる。
- ④ 企業側の意識改革。

以上のことから、問題を解決するためには学生、大学（研究室・教授）、企業の三者に対してアプローチをしていく必要があることが分かる。そして、インターンシップの社会的な位置づけを企業及び関係者、団体にとって有効性の高いものにしていくことが重要である。

7.今後の展望

今後は下図を基本とし事業を進めていく。

準備	内容
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/> コーディネートする機関	<input type="checkbox"/> 現場（実務）
<input type="checkbox"/> プロジェクトの組成	<input type="checkbox"/> 長期（1ヶ月以上）
<input type="checkbox"/> メンターの配置	<input type="checkbox"/> チームで臨んでもらう

これから作るインターンシップは、現場での実務に約1ヶ月間チームで臨んでもらう形式を考えている。その理由はインターンシップを単なる「体験」で終わらせるのではなく、培った力を「経験値」として昇華してもらうためである。そのためにインターンシップの内容をコーディネートする機関およびプロジェクトを組成していくチームの配置、インターンシップ実施期間中に学生を見守るメンターを配置する予定である。

社名	人数	期間	インターン内容	学生コメント	企業コメント
次世代技術分野 西精工株式会社	1/6	8/24～8/28 5日間	マナー研修、現場実習・見学 検査・試験機器取扱いおよび品質管理 業務	職人技のすごさを感じた。大学の授業と 仕事内容のリンクに気づいた。企業の挨拶 (マナー) に対する意識の高さを感じた。	
阿波スピンドル	3/2	8/17～8/21 5日間	企業概要説明→商品説明→各部署の仕事内容説明・ 見学・実習。 (商品説明と工場見学により、取扱商品への基礎知識を 学ぶ。測定工具の説明と測定実習、スケッチにより実践。 加工や工程設計方法を学ぶ商品の加工を行う。)	自分は工学部で、製造の現場を目的 に参加したが今まで知らなかった営業職 にも興味を持った。一箇所ではなく各部署 を回ることで会社全体の仕事が見えた。	
地域医療福祉分野 田岡病院	3/3	8/1～9/30 期間中5日間	医療事務・現場での実務及び見学 →(変更) 臨床心理士と対談、オペ現場見学、医療機 器の仕組み、医療機器メーカーの方との対談+医療事務 業務、マナー講習	医療事務のISだったが、参加者の参加 目的を聞き、実習内容を当日変更して くれた。事務業務の大変さと大切さが分 かったが、事務現場は本当に忙しいそう で、自分は何もできなかつた。	
地域づくり分野 藍の館	6/10	8/19～8/23 5日間	展示場、トイレ等の清掃 藍染体験→お客様への接客(藍染工程の 説明や工房内の誘導) 商品の箱詰め、商品袋づくり	仕事の厳しさと接客業の楽しさを実感 し、就活の参考になった。/資料の魅力 を如何に多くの人に伝えるか、どのような 職業でも自分のする仕事にどのような意 味を持たせるかが重要と気づいた。	若い人の挨拶や接客でお客様に 喜ばれた。海外のお客様に学生 が英語で積極的に対応しており、 助かった。
日本航空 徳島支店	2/2	8/24～8/28 5日間	●空港運営業務(整備業務体験、航空業務体験 (ターミナル施設見学、機創作業見学、旅客業務研 修、座学)) ●日本航空営業業務(旅行プランの売り込み、アン ケート集計・分析・発表、外回り営業への同行)	機械の設計や製造・整備関連のエンジ ニアを目指している中で本物の旅客機 のエンジンやセンサーなどが見られて大変 意義のあるものだった。/営業の基礎は 人間関係にあり、話術とコミュニケーション 能力の重要性を感じた。	営業は転勤者が行っているので 必ずしも徳島出身者ではない。 地元とつながりの深い学生に来て もらえることは地元情報を得られる 上でも大きなメリット。
株式会社ネオゼント あすたむらんど徳島	1/2	8/1～8/31 期間中7日間	接客研修、オリエンテーション 若手社員と同じ業務を体験 最終日発表あり(『あすたむらんどへの提案・改 善案』)	朝夕の点検などを1人で任せられ、責任 は感じたが会社の一員として働いている と実感した。/最終日の提案の為、工 房体験に来た親子にアンケートをとるな ど自分で考え調査した経験は貴重だっ た。	職員の目では気づけなかつた所 まで細やかな視点でみるこが できており、意見は参考になった。

※実施期間、受入人数に関してはH27年度の実績。インターン内容、コメントはH25・H26実施分より抜粋。

アンケート回答企業一覧

1	アール・エスホーム株式会社		
2	株式会社アイ・ディ・エス		
3	藍住町歴史館・藍の館		
4	阿南市役所		
5	株式会社阿波銀行		
6	阿波スピンドル株式会社		
7	あわわ		
8	市岡製菓株式会社		
9	株式会社インフォデックス		
10	上田青果株式会社		
11	(株)H.I.S		
12	株式会社エフエム徳島		
13	大久保産業株式会社		
14	(株)大塚製薬工場		
15	(株)近畿日本ツーリスト中国四国徳島支店		
16	三晃産業(株)		
17	防衛賞自衛隊徳島地方協力本部		
18	四国化工機株式会社		
19	四国化成株式会社		
20	四国計測工業(株)		
21	四国高速運輸株式会社		
22	四国放送株式会社		
23	四国八洲薬品株式会社		
24	ダイソー工業株式会社		
25	高岡税理士事務所		
26	(株)高橋ふとん店		
27	月見が丘海浜公園		
28	テック情報株式会社		
29	株式会社寺内製作所		
30	東光株式会社		
31	株式会社十川ゴム徳島工場		
32	協業組合徳島印刷センター		
33	徳島ヴォルティス株式会社		
34	株式会社徳島銀行		
35	公益社団法人徳島県環境技術センター		
36	徳島県教育印刷株式会社		
37	徳島県国際交流協会		
38	徳島市消防局		
39	徳島市役所		
40	一般社団法人徳島新聞社		
41	徳島信用金庫		
42	徳島ターミナルビル株式会社		
43	株式会社徳島大水魚市		
44	徳島地方法務局		
45	富田製菓株式会社		
46	鳴門市役所		
47	西精工(株)		
48	日亜化学工業株式会社		
49	日本航空(株)		
50	株式会社ネオビエント		
51	ノヴィル株式会社		
52	野村證券(株)徳島支店		
53	(株)秦商事		
54	藤崎電機株式会社		
55	株式会社ホームケアベ入り堂		
56	株式会社ホンダカーズ徳島		
57	港産業(株)		
58	山菱電機株式会社		
59	株式会社山本鉄工所		
60	(株)ヨコタコーポレーション		
61	株式会社四電工徳島支店		